

2008年度の検査室は技師3名の正職本採用も認められ、7人体制での将来構想を具現化する基盤づくりから始まった。

まずは、超音波検査担当技師を増やすべく、検体検査領域より1名生理検査領域へシフトした。

残された検体領域が若手2名になるため、リスク管理の点からも、毎朝の部署内朝礼を行い、リアルタイムの情報伝達と共有及び問題解決の場とした。その他、有休休暇取得と代休消化率を高め、これらを利用した自己研鑽の機会を増やすべく努めた。

【検体検査】

年度末より順次稼動するオーダーリングが滞りなく接続できるように既存の検体検査システムのバージョンアップを行った。免疫血清分析装置は、導入の意義があると考えが高額なため整備に至っていない。

新年度の電子カルテ導入に関し、輸血・細菌・病理の各システム構築を始めた。中長期の機器整備計画が重要と思われる。

回診業務に関しては、NST及びICTに常時1名を出し、情報提供を行っている。医師不足が云われるなか、医師不在時の情報収集など可能なところから他部署と共に動くように努めている。

【生理検査】

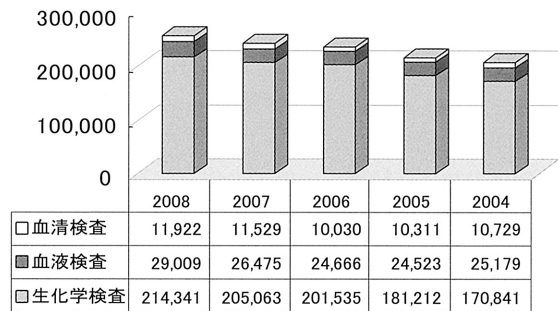
職員1名の退職もあったが、臨床に迷惑を掛けないように努めた。超音波担当技師のスキルアップの為、継続した教育・研修の時間、資材等の物心両面での支援も続けていかなければならない。

電子カルテ化に向けての取り組みは、カスタムマイスを最小限にし、限られたシステムでどこまで電子化をしていくか、関係部署と協議を重ねた。

【今後の展望】

特に超音波検査技術は、すぐに習得できるものではないが、順次新たな技師が研修に加わり検体検査分野との大きなローテーションを進めていきたい。生理検査担当者も時間外を不安なく対応できるように検体検査の理解を深め、地域に最良の臨床検査の提供を目指していきたい。

主な検体検査年度別推移



主な生理検査年度別推移

